

ローランド・ベルガー日本法人代表
長島聡

MacやiPhoneを生んだスティーブ・ジョブズ、テスラやハイパーループを生み出しているイーロン・マスクはイノベーションだ。彼らの生み出した新しいモノやコトが多くの人を「すごい」とうならせてきた。日本企業にはこうしたカリスマ経営者が少ないといわれて久しいが、イノベーションの量産能力の革新は待たなしの状況だ。

日本企業の多くの経営者は、コトの強化が重要な課題であると認識している。コトはモノより顧客の時間を占有でき、ストーリーで人の心を多面的に魅了できる。ストーリーに続きやバリエーションを持たせることで、継続性も生み出しやすい。もちろんモノだけで「すごい」を勝ち取ることもできるが、段違いの

日本型オープンイノベーション

要素技術やアイデアを生み出し続けるのは容易ではない。お笑いに例えると、モノは一発芸だ。強烈なインパクトで社会現象となることもあるが、最後には飽きがくる。一方、コトは2人組で独特の間や掛け合いで都度ストーリーを展開する漫才だ。異なる持ち味の2人組というプラットフォームの上に、様々な笑いの要素を組み合わせたストーリーをのせることで「面白い」を生み出しているのだ。

ビジネスの世界ではコトは2人組ではなく、より多くの人や企業が進めていく。ストーリーに奥行きをつけるために、息が合った登場人物は多ければ多いほど良い。プラットフォームが社会に届けたい本質的な価値を掲げ、多様な持ち味、能力を持つ人材の交わる場となっていれば、驚くほどたくさんさんのイノベーションを生み出せるはずだ。

本質的な価値を定めるのはトップの仕事だ。一方、そうした人材が交わる場を生み出せるかどうかは現場の意志による。仮に価値に賛同して多様な人材が集まっても、共同作業はなかなか始まらない。現場の個人が自らの中に多様性を持ち、自分とは異なる考え方や常識を受け入れないといけないからだ。

やるべきことは、自らの得意技や楽しいことを持つて社外に刺激を受けに行くこと。悔しい思いや恥ずかしい思いもしながら自分の中に多様性をつくっておくこと。そうすれば、いざ共同作業という段で、異能や多様性を理解できる。化学反応がおき、みんなの得意技を組み合わせてイノベーションを量産できる。

日本企業には、開かれた場で継続的にイノベーションを量産する仕組みをインストールしたい。

当欄は投稿や寄稿を通じて読者の参考になる意見を紹介します。〒100-8066東京都千代田区大手町1-3-7日本経済新聞社東京本社「私見卓見」係またはkaisetsu@nex.nikkei.comまで。原則1000字程度。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記。添付ファイルはご遠慮下さい。趣旨は変えずに手を加えることがあります。電子版にも掲載します。